

令和4年度第2回 唐津市総合教育会議 結果概要

1 日時

令和5年2月22日（水） 13：30～14：40

2 場所

唐津市役所 本庁舎4階 大会議室

3 出席者

峰市長、栗原教育長、宮崎教育委員、篠原教育委員、佐伯教育委員

4 事務局

〔政策部〕堀田部長、藤田副部長、森課長、通山係長、犬丸副主査

〔教育委員会事務局〕草場部長、中山副部長、坂口副部長、古場教育総務課長、栗本学校教育課長、古川学校支援課長、岡田学校給食課長、藤井近代図書館長、森係長、坂本指導主事、新指導主事

5 議題

英語教育の充実に向けて

6 概要

英語力に関する話す、聞く、書く、読む、という4技能を小学校で総合的にバランスよく育成し、それを中学校へ発展的に引き継ぐための取り組みについて教育委員会事務局から説明が行われた。

意見等は次のとおり。

（宮崎委員）

小学校低学年の児童たちは、英語の先生と触れ合う機会が少ないと思うが、できるだけ飲み込みの早い幼少期のうちに英語に触れる機会を増やし、興味関心を引き出すことで、今後の能力を大きく伸ばすことができるのではないだろうか。

そうした考えもあり、英語教育のための人員配置が充実することを願っている。

(峰市長)

本来であれば、小学校低学年のうちから英語を聞く機会に多く触れてもらいたいと思っている。学校現場の状況を説明して欲しい。

(教育委員会事務局)

小中学校合わせて11名のALTを配置している。小学校では3～6年生の授業を優先することになるため時間はどうしても少なくなるが、できる限り1～2年生の授業にもALTが入り、英語に親しみやすくなるよう授業内容を工夫しながら、ネイティブの英語を聞く機会を作るようにしている。

(峰市長)

できるのであれば、若いうちからレベルに応じた英語教育を受ける機会を作ってもらいたい。例えば、楽しみながら幼稚園レベルから英会話スクールを実施するなど、そうした学習は良い経験になると思うので、そこまで枠を広げてほしい。委員の意見でもあるし、私の意見でもある。人材確保が課題であることは認識しているが、そこまで踏み込んで英語教育を考えてもらいたい。

(篠原委員)

幼少期からの英語教育という話の中で、外国文化に触れる動機付けは早い方が良いと考える。小学校低学年に向けた本格的なALTの配置は厳しいと思うが、例えば、幼稚園や保育園にも年1～2回、できればそれを唐津市独自の取り組みとして実施できればと思っている。そうすれば本市の施策としてアピールポイントにもなるのではないだろうか。子育てしやすいというポイントで、実際にそうした自治体には子育て世代が多く集まっておられ、とても有効だと思うので是非検討してもらいたい。

GTECのタブレットを操作してみた感想としては、日本の教育はこれまで読み書きが中心で、やっとヒアリング、リスニングが入試に取り入れられるようになった。それでもなかなか評価がしにくいと言われていたが、それがGTECで

4 技能が正確に判定できるようになったことから、英語力をバランスよく育成するため、指導に生かしていく環境が整うのは素晴らしいことだと思う。

(峰市長)

子育て支援に力を入れられている明石市が展開している5つの無料支援制度が話題を呼び、人口が増えていると聞く。人口が増えることで、財政も潤うという好循環が生まれているという。ただし、全国市長会の会議の中でも話題が上がっているが、人口というパイを取り合うことには慎重にならないといけない。子どもが生まれる数は限られていて、それが取り合いのようになるのはどうなのかと。私が思うのは、その前の段階からの、産み育てる環境づくりが大切ではないだろうか。そして色々な方との出会い。そんなところからしっかりと進めていく流れを作らなければ少子化対策は難しい。純粹に英語教育のことを考えると、よければALTに幼稚園や保育園にも顔を出してもらって、幼児にインパクトを与えてもらいたい。幼少期から外国人とコミュニケーションを取ることで、外国語に対するハードルは低くなると思う。実際にレオブラックスはバスケットボールで小学校を巡行されている。小学生はそうした選手たちに親近感を持っており、本当に頑張ってもらっていると思う。私たちの課題と認識して広くやらないといけない。子どもの教育は保育園もあれば幼稚園もあって、そして小学校から中学校へという義務教育の流れがある。そこにしっかりと連携した組織力をもって、子どもたちを育てていく環境づくりを唐津市として目指したい。

(佐伯委員)

幼保小の連携ということで、その取り組みを保護者向けにもお願いしたい。学校教育と併せて家庭教育もとても大切だと思うので、そうした積極的な取り組みをお願いしたい。GTETCに関しては、そこから得られる情報というのを、先生たちだけに留めず、家庭に向けても一体的に行ってもらいたい。

(教育委員会事務局)

幼保小連携会議というものを開催しており、そこで英語教育を議題として話題を深めることができる。

(峰市長)

英語教育において、G I G Aスクールで導入した1人1台端末、そしてG T E Cのタブレット端末、これらは日常的にどのような使い分けをされるのか。

(教育委員会事務局)

まず、A L Tが授業に入るときはリアルなコミュニケーションを重視しているのでそれが中心となるが、例えば、その授業の中で1人1台端末を持ちながら自分の好きな国を説明するなど、そうしたツールとして活用している。日常的には電子黒板を中心に授業が展開されることになるが、授業が終わった後の復習として、タブレット端末でネイティブの発音を聞き返したり、文部科学省の学習サイトを自学で使用したりと、学校、家庭、場所を選ばずに使用されている。

G T E Cの端末はテスト専用機となるので、そうした学習の成果を定期的に測るものとして活用できる。

(峰市長)

1人1台端末がどのように活用されているのかを知りたかった。自分自身で意欲を持って、自由に使ってもらうことを期待している。そうしてG T E Cでも点数を取れるように、そうした流れを期待している。

(栗原教育長)

1人1台端末は、少しずつ上手に活用できるようになってきている。恒常的にタブレットを使っているかということ、それはイメージと少し違うかもしれないが、話す、聞く、書く、読む、それを子ども同士の中でやっていたり、A L Tが入る授業でも活用したり、授業の中では様々なやり方がある、上手なタブレットの使い方というものを少しずつ実践している。

(峰市長)

英語教育に関して、もし他の自治体で有効な取り組みをされているとすれば、唐津の子どもたちにも同じことをさせてあげたい。本市はこのことに取り組んでいるからと満足せずに、色々なことを取り入れたい。もちろん、最後は子どもたち自身がどう頑張るか、どう興味を持つかであるが、その機会を与えるのは私たちの役目だと思うので、チャンスを与えてあげたい。それが本市の取り組みとしてのPRにもなると思うしチャレンジしていきたい。

(篠原委員)

自分の経験では、英語の学習は続けることが一番大切であると思っている。学校教育の外でも学習に取り組みやすいように、例えば、図書館でもインターネット環境で学習ソフトを使用し、実際に英会話の練習ができるような整備をされると素晴らしいのでは。

(教育委員会事務局)

図書事務員や学校長等と相談のうえ、できるだけ新しい本を導入してコーナーを設置している。小学校低学年でもそれに触れることができるように工夫しているが、そうした流れは英語教育の導入前は見られなかった。

(峰市長)

本市独自のブックスタート事業も展開しているので、そうした学習意欲に繋がることを願っている。グローバルな「からっつ子」を育て、外国人と会話できたときの喜び、そうしたものを味わえるようになって欲しい。

以下余白